仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二ー22ー七三七一番
編集・発行人　首藤　正義

国家権力は絶対か？
ー村首師　やむなく押なつー

去る2月26日、村首ステファノ師は27日の在留期限切れを前に指紋を押なつした。「押なつは人種差別」とする主張と「愛する日本に住みたい」とする望み。二者択一をせまられ揺れる心の中で期限切れぎりぎりまで悩み抜いた上での最後の決断だった。

これまでの経緯

村首師は一昨年の10月、外国人登録証明書の切替え手続きの時以来、指紋を押すことを拒否してきた。在留期間が切れた去年の11月末、3か月の猶予期間が認められた。しかし3か月の猶予期間が終るのを待たず、今年の2月25日、法務省当局は村首師に今後の在留を認めないという決定を下した。村首師は止むなく指紋を押なつし、在留期間更新の許可申請を出し、1年間の在留許可がおりた。

権力思考の問題点

指紋押なつ問題を通じて明らかになった国家権力側の問題点。基本的人権・法の下での平等を明記している日本国憲法の基本的理念からの視点の欠除。指紋押なつ制度がどれだけの在日韓国人、在留外国人の心を無視したものであるかに目を向けることなく、法律だからの一点ばり。また、問題提起をした人を徹底的に身辺調査し、権力の都合のいい作文を作りあげて書類送検する。警察国家といわれる日本の社会にあって、個人のプライバシーがどれだけ守られるのかという疑問をいだかせられる。そして、地域社会の中で孤立化を画り、結局は黙らざるをえないような状況に個人を追い込んでいく。またメンツにこだわり、民の声に耳を傾けるよりも権力の論理をいかに徹底させるかにウエイトが置かれている。これは今教育界で問題となっているいじめと同じ権力の名のもとでのいじめである。

教会の役割・使命

このような日本社会にあって、教会は信仰上の道義的な立場から発言していかなければならない。人間が人間たる尊厳・正義が踏みにじられているならば、今後もその時々、沈黙を守ることは許されない。たとえ重い十字架を背負わされても…。

仙台司教区50周年記念
《仙台教区大会》
メインテーマ
「明日の教会をめざして」
期日：昭和61年9月14日(日)・15日(月)
場所：仙台白百合学園

司教様の日程
（3月13日現在）

3月7日　カリタス・ジャパン、中央協財務委員会（東京）
10日　司祭評議会（仙台）
11日　中央協機構検討委員会（東京）
21日　司牧評議会（仙台）
26日　聖香油のミサ・宣教奉仕者選任式
27～29日　聖なる過越の三日間（元寺小路）
30日　復活主日（元寺小路）
4月7日　教区司祭団役員会（仙台）
9日　中央協・機構改革委員会（東京）
10日　常任司教委員会（東京）
13日　福岡カテドラル・センター落成式
17日　カリタス・ジャパン運営委（東京）
21～22日　教区司祭団月例会
24日　中央協機構改革委員会（東京）
29日　五戸カトリック幼稚園落成式

教区大会実行委員会から

実行委員会は今まで5回の会合を開きました。今後頻繁に会議を重ねて具体的なことを煮つめてゆきますが、決まったことや方向のあらましをお知らせします。

＜財務部関係＞ 参加費は高校生以上一人3千円、各教会分担金として信徒実数×300円。参加の交通手段には、岩手地区でも考えたように、宮城を除き、県ごとに大型バスを予想し、その費用を支給する。参加費・分担金の徴収、配分方法は今後考える。

＜宿泊部関係＞ ホテル、旅館は日本交通公社とタイアップして宿泊申込を受ける。公共の宿泊施設については資料を各教会に流し、(早目に)直接申込んでもらう。学校の宿泊、ホームステイは宿泊部で斡旋する。これらの案内や申込書は4月中に各教会に送る。但し申込締切は5月末日とする。

＜広報部関係＞ 参加者の興味を一層そそるために、講演者やパネラーの発表内容の抄録を7月迄には教区全体に配布したい。

＜展示関係＞ 全小教区の紹介のために、各教会に写真（B4版以上）、記念誌等をお願いする。

＜教会学校関係＞ 幼稚園児以上小学生を対象に部会を設けてお世話する。

＜祝賀・懇親会＞ 会場は白百合幼稚園ホール。但し、会費は500円でなく千円とする。(参加者負担)

＜典礼関係＞ 聖歌等早く決め、各教会で練習してもらわなければならない。

アルジェリアはアラブの国。イスラムと僅かな天然ガスとサハラの砂漠。その西北端に、ベニ・アベスという人口六千人ほどのオアシスがある。かのシャルル・ド・フコー師が四年間住んだ町。縁あって赴いた。

真っ青な空。澄んだ大気。見渡す限りの砂丘。砂漠がこれほどまでに美しいとは、想像できなかった。そして、何よりも砂丘の中へほんの僅か踏み入ったとたんの、たとえようもない静けさ。この砂の世界で通用するのは、恐らく祈りだけだろうと思った。神を知らなければとても生きてはいけない世界。

人間、ものに囲まれていると、物陰からしか神が見えなくなってしまうのだろうか。神が身をかくすのではなく、ものを神の前に置いて、見えなくしてしまっているよう。

空と大気と砂だけの世界に身を置いたとき、真っ正面の砂丘の真っ只中に、ちゃんと、ニッコリほほえみながらいらっしゃるではありませんか。その後、安心したのかどうか、私は砂丘の中で小一時間ほどねむりこけてしまいました。

（笹気　直哉）

「神さまは笑っていたよ」

司祭人事異動＝仙台司教区内

（4月1日付、敬称略）

教区司祭団

鷹觜達衛　大湊教会主任司祭（一関教会）
佐々木博　築館教会主任（日本カトリック宣教研究所長）
土井勝吾　角田教会主任（大湊主任）
梅津明生　一関教会主任（築館主任）
高田徳明　亘理教会主任（亘理、角田主任）

ケベック外国宣教会

R・デロシェ　本町教会主任（浪打助任）
M・ラフォルト大清水学園（本町主任）

グアダルペ宣教会

J・ラレス　会津若松教会主任兼田島教会主任（会津若松主任）
E・ゴメス　会津若松教会助任兼田島教会助任（白河助任）

黙想会　ご案内

テーマ　「私に聞かせて下さい」
指　導　板垣　勤師（元寺小路教会）
期　日　昭和61年5月3日午後6時30分～5日昼まで
対　象　26歳までの未婚女子信徒
会　費　参千円　定員　8名
持参品　聖書・筆記用具・洗面用具
会　場　980仙台市本町一丁目2－12　聖パウロ女子修道院　電話〇二二二－23－八六三九
申込締切　4月20日　会場の都合で、先着順で締切らせていただきます。

192センチからの日本の眺め(3)

日本は特別か?!

村首ステファノ

日本人は、「自分たちの文化は独特である」という意識が強い。いくつかの例をあげることができる。

見合い結婚は日本独特なやり方だ、とひとは言う。これを聞くと、私は不思議に思う。大昔からどこの国においても見合いによって結婚を決めていた。むしろ恋愛結婚は人類の歴史では例外であった。

また、外国人と日本人が出会うと、よく日本人は、相手がアメリカ人であれば、アメリカではどうですかと聞く。聞かれた人は非常に困る。「私はこう思う」、「家ではこういう習慣があった」とか自信をもって言うことが出来るが。ただアメリカの代表者となって、アメリカではこういう風にやる、こんな習慣がある、となかなか言えない。日本人は逆に、日本人の代表者になり、「日本では」と簡単に言う。

確かに日本は他の国と様々に異なる。国が違うから習慣・考え・文化も異なる。しかし、たとえ差があったとしてもどれだけそれが強いか、という問題だと思う。ところが日本人は「日本は特別だ」という意識が非常に強い。

他の例であるが、ひとは外国に行った時、お客として行く訳です。イタリアであればイタリア人の好きな食べ物がある。小さいときからイタリアで生活し、もし誰か客が来れば、自分が一番おいしいと思うものを客に出す。当然おいしいと思うに違いないと、何も考えないで出す。ところが客がそれを好まないと知るとビックリする。私たちが非常においしいと思うのにどうして好きでないのかと。日本の場合は逆に、これは日本人の食べ物であるから外国人はこういうものを食べないだろうと、考える。このような差を感じる。

ずっと前のことだが、「ユダヤ人と日本人」という本が出た。その中で日本人の宗教について「日本教」ということが言われた。私はこれは正しいと思う。多くの日本人は国のために生きている。口にこそしないが、会社勤めでも、日本という国の繁栄のため、これが非常に強い。一個人を超えるものとして日本全体が考えられている。中国の諺に、「どこへいってもカラスは黒い」というのがある。人間は中国人である前に、日本人である前に人間であるということ。

時々、「これは日本人のクセである」と聞くが、人間である限りひとはある種の傾向を持つもの。それは国籍と関係ないと考える。

聖書をみると、ユダヤ人は、選ばれた民族・正しい法を保持・アブラハムの子孫である、という誇りを持っていた。イエスはそれを駄目だとは言わないが考え方が狭いと思っていた。ユダヤ人であるかどうかが決定的なことではなく、根本的な姿勢、神に対する姿勢こそ大事だとイエスは指摘する。他人に対する根本的な姿勢が大切。人間そのものを中心にして考えるのが大切なのではないか。

仙台キリシタン殉教祭

去る2月23日、仙台キリシタン殉教祭が仙台市・広瀬川の殉教碑前で催された。例年にない暖かい日ざしの下で、「雄々しくもいさぎよき」の聖歌を歌い、170人の信徒が集い、「仙台キリシタン殉教録」に耳を傾けた。

この殉教録は、今から三百六十二年前に、伊達政宗によって刑が命じられ、刑が執行されるまで、カルワリオ神父と八名の信徒の寒中水責めによる壮烈な殉教の様子が詳細にのべられ、彼らの殉教のいさおしと、偉業を、あらためて深く味わうものとなり、参加者の気持を引きしめるものとなった。

当番教会塩釜教会の主任司祭である平賀師は説教の中で次のように語った。

「信仰に生きぬいた先達のように一粒の麦となって死ぬ覚悟はあるか。キリストの愛の証をするため命をおしまない信念があるか。現代の日本では幸い信仰上の迫害はないが、信仰するうえに圧迫される事実が時々見られる。現代のキリスト者として大切なことは、苦しんでいる人をキリストの苦しみとして受けとめ、信徒の苦しみを自分も共に苦しむことである。他者のために私自身も苦しもう」。

殉教祭のあと元寺小路教会で「愛熱の焔」―広瀬川殉教の記録―を観賞。(小野 英夫)

スカウトはいま！

四ツ家教会

教会に、キリスト教を基本にした本来のスカウトを育てたい、教会の子供達にスカウトの良さを体験させたい、というのがきっかけで、故小野寺耕作さん（元岩手県連理事長）を中心に、教会ぐるみで発足しました。

昭和50年11月9日、両団が仲良く発団式を行ない、そして昨年11月17日、発団10周年記念を迎えました。発団の趣旨から、当初スカウトはほとんど信徒でしめられていました。従って規定ぎりぎりの人数でした。勿論団の方針は、本人の宗教宗派に対してはオープンですから、次第にスカウトが増えると共に、現在ではキリスト信者以外のスカウトが大部分を占めるようになりました。

◎当教会の団は二つの特徴をもっています。

(1)各人の信仰を尊重しながら、キリスト教をスカウト活動にとり入れる。

(2)ボーイスカウト、ガールスカウトの共存。

これはスカウト、リーダー共にお互いに励みになるばかりでなく、協力することにより、活動の活発化を導いています。

◎次に実際の活動内容を紹介します。

ボーイ、ガールそれぞれ独自の活動を行なっていることは言うまでもありませんが、合同の作業もとり入れています。例えば(1)合同の団会議を年に数回行なっている。(2)年間を通じて合同の活動が行なわれる。総会は勿論、バザー、夏期キャンプ、クリスマス等。(3)スカウトの活動日は、原則として毎月第一、三日曜日午前9時から。

活動は典礼に始まりますが、一般のスカウトにも理解できるように、数年前からスカウトミサ（神父様が司式）と、最近では御言葉の典礼（団委員長が司式）を行なっています。これは一体感を深める意味で好評を得ています。教会の団らしい特徴を活動のなかに入れてほしいという団委員からの希望によるもので、非常に大切にしています。典礼後は、各団、隊毎に分かれて活動します。

◎ボーイスカウトの活動について

本年度の登録者総数は38名です。カブ、ボーイスカウト隊、シニア班、リーダー、団委員が含まれます。団として必ずしも安定した状態にあるといえませんが、ヨゼフ神父様を中心に、明るく生き生きとした存在感のある活動をすることをモットーにしています。ボーイはなるべく野外活動に重点をおき、郊外にある上堂教会にスカウトハウスをつくり、比較的広い庭を利用して時々キャンプ生活を行ないます。来年度はシニア隊ができそうです。大いに期待していますが、と同時に、他の隊と如何に有機的な関係を保つかが課題となりそうです。

◎ガールスカウトの活動について

去る11月に発団10周年を迎えたガールスカウト岩手第18団は、少女48名、成人会員15名の構成で、月2回、教会を集会場として活動しています。当団の自慢出来ることの一つとして、夏の野外活動があります。指導者の大半がライセンスを持っていることを活かして、発団以来一度も欠かさずにキャンプをしています。キャンプ生活は、この運動の柱である自己開発、人との交わり、自然と共にの条件を全て満たしているからです。未熟ながらも自分達で住まいを整え、食を用意し、創造の神に感謝と賛美を捧げ、自然に祈る姿を見ることが出来るのです。10年の間に実に多くの少女達が巣立って行きました。今の子供達が一様に抱えている学校行事や、忙しすぎる繁多な日常の中で、少しでもこの運動に関わりをもったことは幸いだったことでしょう。

最も私が希望し、そして支えられる言葉は、ある指導者を励ました「必要なものであるならば、神は可能なものとしてくれるでしょう。信頼して努力しましょう」です。

我々の団の何よりも良いことは、キリスト信者も信者でなくともお互いに本音の話し合いがなされていること、一体感のあることです。キリストの教える奉仕の心と、スカウトが奨める奉仕が全く一致し、教会とスカウトが一緒になって奉仕活動を行なうことも度々です。今後私達の希望は、目的を同じくする団が、県下又は教区に沢山あると思います。これらの兄弟と友情交換が行なえたらと願っています。

【編集後記】　2月、遂に教区報を出せず、幾人かに迷惑をかけてしまった。「神父様がどこかに置き忘れたのでは？」と。毎月の教区報を待っている人がいることを知り、ありがたいと同時に責任を痛感。（首藤）